

ひらふくすいあんひつりょくいんせいだん
平福穂庵筆 緑蔭清談

1 種 別	有形文化財（絵画）
2 名称及び員数	平福穂庵筆緑蔭清談 1幅
3 所在地	横手市赤坂字富ヶ沢62番地46 秋田県立近代美術館
4 所有者	秋田県
5 制作年	明治19年(1886)
6 材質・形状	紙本墨画淡彩、軸装
7 寸法	縦150.0cm、横79.2cm
8 説明	

本作品は、幕末から明治にかけて生き、中央画壇で活躍した本県出身の画家、平福穂庵の晩期の代表作である。

平福穂庵（通称順造、名は芸^{うん}）は、弘化元年(1844)に仙北郡角館町の商家に生まれた。父の影響で幼少時より地元の絵師・武村文海^{たけむらぶんかい}に師事して円山四条派の画法を学んだ。12歳で久保田城下に学び、絵画技術と漢学の素養を得る。画号は初め文池^{ぶんち}と号したが、16歳で京都に絵画修行のため遊学しており、その道中で自ら穂庵と改号している。慶応2年(1866)、22歳で京都より帰郷した後、明治5年(1872)から北海道にたびたび渡り、アイヌの生活を写生するなどして絵画表現の模索を続けた。明治15年(1882)の第一回内国絵画共進会にて、実物写生によって描いた「乞食図」が褒状を受賞し、中央画壇で初めて評価された。明治19年(1886)に東京に進出し、宮内省に納める画帖の揮毫者^{きごう}に選ばれたほか、美術雑誌『絵画叢誌』の編集、掲載用古画の縮写業務にあたるなどして活躍した。明治22年(1889)に体調不良のため帰郷するも、角館にて制作した最晩年の代表作「乳虎」が、明治23年(1890)の第三回内国勸業博覧会で妙技二等賞を受賞。同年12月に46歳で没した。「乳虎」は平成17年3月に秋田県指定有形文化財に指定されている。

穂庵は、円山四条派の画法を基礎に写生を重視し、文人画等他派の作品にも描法や構図を学んだほか、幕末から明治初期にかけての洋画の描法などにも関心を寄せていた。伝統的な筆法を踏まえながら、墨と筆を駆使して光や空間の表現に挑戦した本作品は、その研究成果を示している。文人たちが俗世を離れ大樹の木陰で悠々と茶を煎じながら清談する光景が描かれており、光を含むような樹木の描写は、洋画的な陽光表現を感じさせる。画面中央に樹間と清流を配置する構図や、奥に見える霞んだ景色を薄墨で描写する表現は、西洋の遠近法にも通じる。緑蔭から風が吹き抜けるような大気を感じさせる空間や、自然の瑞々しさを見事に表出した臨場感豊かな作品となっている。

明治前期、急速な欧化政策により日本画家たちが方向性を模索していた時代に、穂庵は伝統的画風を十分に生かした上で新味を加える描写により、いち早く近代日本画の発展を予感させる作風を示した。本作品は、同時代の南画的山水表現に西洋的写実性を取り入れて新機軸を打ち出した先駆的な作品であり、穂庵晩期の代表作である。

参考文献

- 『平福穂庵画集』 大日本絵画 昭和58年(1983)7月5日
加藤昭作 『評伝 平福百穂』 短歌新聞社 平成14年(2002)10月20日

太田和夫 「平福穂庵の作品 検証－変革の時代に生きた地方画家－(補遺)」『秋田県立博物館研究報告第35号』 平成22年(2010)3月16日

秋田県立近代美術館 『没後一三〇年 平福穂庵展 図録』 令和元年(2019)11月16日



平福穂庵筆 緑蔭清談 (秋田県立近代美術館所蔵)